

鈴木昭男

《道草のすすめ - 「点音 (おとだて)」 and "nozo mi"》

2018-19

《点音》は美術館内と敷地内に点在する12個の白くて丸いプレート。《no zo mi》は屋外展示場にある5つの階段状のもの。足とも耳とも見えるマークが目印。見つけたらたぶん乗ってみたいくなる、そんな作品です。美術館で作品に乗っていいの？ そう思われるかもしれませんが、子どもの頃、駐車場の車止めブロックのような地面から少し高いところについ上ってみたいくなりませんでしたか？ そんな気持ちのまま、ぜひ《点音》に乗って、耳を澄ましてみてください。

12の《点音》の場所の地図もご用意しています。

手に入れて探検開始です！

ガイドスタッフ Y



オノサト・トシノブ 《はにわの人》 1939

この人、腕に丸いものをしっかりと抱えているようにも  
見えますね。きっと大切なものだね。左足をあげて  
こっちに向かってくるようです。なんだか楽しそうです。  
大切なものをあなたに見せたいのかもしれない。  
1939年、この頃、オノサトは「はにわ」の素朴さと  
単純さに惹かれ、そこに人間の本質を見ていました。  
具象と抽象を行き来する中でこの作品は生まれました。  
「はにわの人」が夢の中に現れて、「この丸、どう？」  
とでも言ったのかもしれない。この「はにわの人」  
以降、オノサトの作品に「丸」や「円」が繰り返し  
登場するようになります。

ガイドスタッフ！



オノサト・トシノブ

《朱の分割円》1960, 《赤の丸》1960, 《四つの丸》1961

～ ある日のギャラリートークから ～

「こちらの円は柔らかい印象ですね。水彩ですか？」

「そうです、水彩です。円の中も線で区切られていて、色も多彩に塗り分けられています。にじみで立体的に見えますよね。」

「円が呼吸しているみたいだし、織物にも見えますね。」

「そういえば、オノサトの暮らした桐生は絹織物の産地ですよ。」

・・・抽象画の見方でお悩みのかた。こんな風にご自分の感性で作品を楽しんでください♪



ガイドスタッフY

向井潤吉 《影(蘇州上空)》 1938

まるで晴れた日に飛行機に乗って描いたような壮大な景色。大きな川に沿って延びる街並み。広場までつながっている通りには人の姿や洗濯物まで見えて、市民の日常生活に触れるような気持ちになる。そんな優しい気持ちとは裏腹に、巨大な飛行機の影のなんとも言えない不気味さ。

30歳代後半で自ら従軍画家として中国へ渡った作者。当時この絵で描きたかったのは中国への影響力の誇示か、それともこの街に忍び寄る苦難への暗示と共感なのか。実際には街に写ることのない影に、制作から80年以上経っても見る側の私たちの心は締め付けられる。

ガイドスタッフH



中村研一 《青年航空仕官（レイテ突撃前夜）》 1945

最近では遺影の代わりに、3Dプリンターで故人のフィギュアを注文して飾ることも可能ですが、そのようなハイテクがなかった70年以上前、戦死した故人の肖像画や胸像が遺族の依頼で制作されたそうです。この作品もそのひとつです。

作者の中村研一が制作の際に参考にしたのは、青年が内地を離れる前に家族へ送った白黒写真。青年の面影は、絵画となり色彩を得たことで、鮮明になりました。ちなみに、左下に作家のサインと制作年が記されていますが、制作年は西暦ではなく、戦前・戦中に使用された皇紀で記されています。



ガイドスタッフ Y

麻生豊 《戦後焼跡賑わい風景》 1946

この絵は横長の紙に描かれています。戦争が終わった次の年、傷跡が残っている場所にもう建物がチラホラと建ち、大勢の人々の様々な姿が。キャバレーのお客様はご機嫌なアメリカ兵。平和な生活へ向かって動き出す人々。そんな様子を優しく温かい色彩が包みます。

作者は漫画家。新聞に毎日マンガを連載していた人気作家です。人々の心を明るくしたマンガの主人公“ノンキナトウサン”の姿が画面のどこかに見つかるかも？福富太郎さんはこの絵のどんなところが気に入ってコレクションに加えたのでしょうかね。



ガイドスタッフO

秀島由己男 [『彼岸花』より] 1973

ようこそ深く静かな世界へ。

作者の秀島が「私にとって黒こそすべてをあらわす色だ。」と語っているように、どの作品もなるほどとうなずけますね。銅板に微細な傷を沢山つけ、たっぷりのインクを保持させるメゾチントという技法を主に使って制作されました。

一連の作品は、詩画集『彼岸花』の挿画で、詩は石牟礼道子が手がけました。作品・タイトル・詩、ひとつひとつ二人の想いに想像をふくらませてみてはいかがでしょうか。



ガイドスタッフS

岡本信治郎 《BIRDMAN・テロのデッサン》

2002, 2009

落書きやマンガを思わせるような、勢いのある線。描かれているのは銃口でしょうか？それともロボット兵器？ぐるっと取り囲んで、まるでこちらに狙いを付けているみたい…。

この作品のテーマとなっているのは、2001年9月11日に起きたアメリカ同時多発テロです。テレビで流れる事件の映像に衝撃を受けた岡本信治郎。その脳裏にぱっと浮かんだのは、「真珠湾攻撃」と「神風特攻隊」でした。戦争下で過ごした自らの少年時代をとらえ直すきっかけともなったこの事件。ポップな雰囲気でも暴力が描かれた画面からは、狂気が見え隠れするようです。



ガイドスタッフK

岡本信治郎 《ころがるさくら・東京大空襲》 2006

あちこちに描かれた赤いトゲトゲ。東京大空襲を  
思わせつつもおどろおどろしさはなく、花火のよう  
でもある。上野地下鉄ストア、古事記、靖国神社…。  
どこか滑稽なモチーフと、無数の文字。終戦の詔書  
から青いトゲトゲに変わる。1階に展示中の作品を  
描いた福沢一郎や鶴岡政男の名も。そしてビートルズ、  
冷戦、同時多発テロへ。作家が生きてきた時代の  
断片が、平時・有事の区別なく、連続性をもって  
ひたすら羅列されている。

惜しくも岡本は今年の4月にこの世を去ったが、  
コロナという新たな「崩壊」を、彼であればどう  
描くのだろう、と考えずにはいられない。



ブレンダ・ファハルド

《タロット・カード・シリーズ》 1993

ブレンダ・ファハルドは米国で学び、フィリピンの女性作家の先駆者として、ショーパブのダンサー、工場の作業員、富裕層宅で働く家政婦など、他国へ出稼ぎに行かざるを得ないフィリピン女性の厳しい現実を描きました。絵に配されたタロット・カードは女性たちの未来を暗示しているのでしょうか、低賃金の労働力として搾取されながら命を落としても不慮の事故と済まされてしまうこともあったそうです。

制作から 25 年以上経った現在も様々な国で女性と社会をめぐる問題は変わることなく存在し、作家の思いは私たちの心に強く伝わります。



ガイドスタッフ T

草間彌生 《無題》1951, 《中国の岩》1954,  
《地球の創生期》1954



ガイドスタッフ M

紙に描かれた無数の暗い水玉、植物の種のようなもの。作者の草間彌生は幼い頃より動植物が話かけてきたり、周りが水玉や網目で埋め尽くされるという幻覚に悩まされていました。そして自身がみた別世界を描く事は彼女の心の支えでした。

この3点は草間が20代の頃の作品です。毎日絵を描き続けた少女は、画家として歩みはじめ、沸き上がるイメージを次々と描いていきました。そんな草間の絵画には、恐怖心のなかにもどこか力強さも感じませんか？

同室内にある《一億光年の星屑》に描かれた鮮やかな水玉や網目と併せて鑑賞するのもおすすめです。